

近年の南アンデス・ケチュア語口承文学におけるテクスト公刊とその「読み」の可能性

藤田護（アンデス・オーラルヒストリー工房、慶應義塾大学）

キーワード： 口承文学、ケチュア語、語り、文体

Las recientes publicaciones de la literatura oral quechua surandina y sus posibles lecturas

Mamoru FUJITA (Taller de Historia Oral Andina, Universidad de Keio)

Keywords: literatura oral, quechua, narrativa, estilística

1. はじめに

南アンデス高地にはアイマラ語とケチュア語という二大先住民言語があるが、口承文学の物語世界はアイマラ語圏とケチュア語圏で厳密に分けられるものではない（ただし蛇の力を得た女性の物語であるチョケル・カミル・ウィルニータはアイマラ語圏では非常によく知られているが、ケチュア語圏では管見の限り見たことがない）。またアイマラ語とケチュア語は文法や語彙が互いによく似ているため、それぞれの語りの文体にも似ている点があり、その類似点と相違点の検討が必要になる。ここでは、近年のケチュア語の口承文学の記録の新たな公刊をとりあげ[Gutman 2023a, b、Durson, Itier y Landeo Muñoz 2024]、アイマラ語口承文学を主に研究する立場からこれらの物語りの特徴を検討する。

2. 収められている物語の種類と特徴（「物語世界」）

Gutman [2023b]は物語を主題に併せて分類しており、ここにはアンデス広域にみられる物語と、記録がとられたクスコ県南部のポマカンチ独特の物語があると言えそうだ。前者には、山、ファン・エスコペタ、ヘンティル、コンデナード、ドゥエンデ、様々な動物譚があり、後者にはカンチマチュの物語や湖が主題になった物語がある。

Durston, Itier, y Landeo Muñoz [2024]においては、「神話」と位置づけられるような物語がなく、その土地独自の伝承と位置づけられそうな物語もないため、物語自体のバリエーションはそれほど大きくなない。その一方で、これらの物語が村の具体的な民俗習慣や歌と組み合わせて記録さ

れていることが興味深く、編者らもこの回復された文書を『ワロチリ文書』になぞらえている。

以下、具体的な物語世界について、Gutman [2023b]に基づいて何点かを検討する。

（1）カンチ・マチュの物語

カンチ・マチュ（Qanchi Machu、マチュは「老人」）は、この世界を創出したとされる民族集団としてのカンチスの文化英雄であり、以下のように集団の本質を体現する存在とされる——Hinaspas chiqaq qanchis chay Qanchi kasqa. [ibid.:76]

（スペイン語訳（筆者による）——Siendo así verdadero qanchis ese Qanchi (Machu) había sido.) 他のマチュたちと関わり、競いながら物語が展開し、石（=土木工事）を操り、またインカの支配に服しながらインカの意向に完全には従わないなど、『ワロチリ文書』におけるワロチリのワカたちの振る舞いとよく似ていると言えそうだ。

（2）動物譚

動物同士が関係する物語では、言葉を通じて異なる種のあいだで意思疎通ができる。それぞれの種が「動物」的な特徴と「人間」的な特徴（文化）を兼ね備えている。

それに対し、動物と人間が関係する物語では、人間は基本的に動物に騙され、動物側の意向を人間が分かっていないことが多い——

“Maypitaq, papáy, querpachaykimani? Kuskay’puñkusunchis, riki. Kuskallapunin visitaykuwanqa puñkuyku”, nispa nisqa. [ibid.:288] （スペイン語訳（筆者による）——“¿Y dónde pues, papáy, podemos alojarte? Juntos pues nos dormiremos, ¿no? Juntos nomás siempre con nuestras

visitas nos dormimos” diciendo había dicho.)
この発話はノミの姉妹によるものであり、人間に姿を変えて上のようない言葉で誘惑しつつ、最後には人間を食べてしまう。また、自分が料理したスープを食べてしまった犬を殺した旅人が、犬社会の判事ら上役たちに当該の犬への虐待を糾弾され、食い殺される物語もある。このような分かり合えない得体の知れなさのなかで、人間は動物と関係をしている（[藤田 2023]も参照）。

（3）山岳神（アブ）

アブはビクーニャを人間にとてのリヤマのように使っている——

Hinaspan chay wik'uñakunas, chay linajekunaq wikk'uñansi, llamansi cargayukuspas tuta purin. [ibid.:36]

（スペイン語訳（筆者による）——Siendo así, esas vicuñas, dicen, de esos linajes su llama, dicen, su llama, dicen, cargando, dicen, de noche camina.）

アブは人間の病気を治すことができる

“Arí, khaynatan, khaynatan nuqayku unquyku. Chaymi, arí, linajey, linaje wahachikamuykiku. [...]” “Imaynataq mana nuqari hampiymanchu. Bueno, makillaywanyá llamp'isaq.” [ibid.:32]

（スペイン語訳（筆者による）——“Sí, así y así nosotros nos hemos enfermado. Eso sí, mi linaje, linaje hemos hecho llamar. [...]” “Y cómo yo no voy a poder curar? Bueno, con mi mano nomás pues tocaré.”）

シャーマンが呼び出すことで、人間は山岳神と直接接触をして、やり取りをすることが可能になる。山岳神は人間の形で出てきており、linajeという別称からも祖先神としての位置づけが読みとれる。人間と祖先神との関係は、ブラジル人人類学者エドワルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが提示した「パースペクティヴィズム」や「多自然主義」の考え方と共鳴する面がある。

3. 語りの文体の特徴

ケチュア語の伝聞を示す形式には、遠隔過去を示す動詞の活用の形式-sqa と、伝聞を示す接尾辞-s/-si が存在する——

Urqupis atuq ukuchawan tiyasqa. Ninakusqaku

“kumpari, kunanmi santunchik” nispa. Atuqñataq nisqa, “kumpari, hitarrata tukamuchkay”. Hinaspantaqsi ninawan kañaykusqa. [ibid.: 67]

（En el cerro, dicen, con un ratoncito había vivido. Habían dicho entre ellos “compadre, ahora es nuestro santo (cumpleaños)” diciendo. Y el zorro ya había dicho, “compadre, guitarra estate tocando”. Y siendo así, dicen, con el fuego la había quemado.）

Durson, Itier y Landeo Muñoz [2024]においては、最初は遠隔過去を示す動詞屈折接尾辞-sqa と伝聞を示す接尾辞-s/-si を併用して語り始め、徐々に-s/-si だけを用いて動詞は単純形（現在形）で活用させるようになることが多い。

Gutmann [2023b]においては、同様に-sqa と-s/-si を併用するものも多いが、最初から-s/-si しか用いないものもあり、最初から単純形（現在形）しか用いられない物語もあり、動詞 parlay「話す」や niy「言う」を多用することで伝聞を示している場合もある。

暫定的な仮説としては、元が筆録資料であるらしい Durston, Itier y Landeo Muñoz に対し、Gutmanの方が、より会話的環境の中で記録が行われており、より語用論的な意図が話者のなかで前面に出てくると、文体のバリエーションが大きくなるのではないだろうか。

【主要参考文献】

Gutman, Margit, 2023a, *El Qanchi Machu aún vive (tomo I). Cuentos orales quechua de Pomacanchi.* Arequipa: Ediciones El Lector.

Gutman, Margit, 2023b, *El Qanchi Machu aún vive (tomo II). Antología de cuentos orales quechua de Pomacanchi.* Arequipa: Ediciones El Lector.

Durston, Alan, César Itier y Pablo Landeo Muñoz, 2024[1957-8], *Textos quechua de la zona de Coracora.* Toronto: York University Library.

藤田護、2023、「口承の物語に現れる人間と動物の関係を読み直す——南米アンデス高地のアイマラ語と北東アジアのアイヌ語の物語テクストから」、『言語文化と政策（シリーズ総合政策学をひらく）』宮代康文・山本薰編、pp.61-76、慶應義塾大学出版会。